

富士山登頂日本一の實川欣伸さん 目標は2230回(フジサン)

登頂回数1770回(2015年2月現在)

1985年、家族そろってお盆に富士山(3776メートル)に登った。42歳。これが実川欣伸(よしのぶ、71歳)の富士山初登頂であった。静岡県沼津市に住む富士の裾野の住人とすれば1回くらいは、という気持ちだった。それが90年代後半から富士山に取りつかれたように登り始める。2015年2月現在の登頂回数は1770回、常人のなせる業ではない。

特にこの3年間は、記録を意識して挑戦してきたという。2008年は250回を目標に定め、なんと248回。09年も203回だ。米大リーグのイチローの200安打(10年連続)並みに“富士山のイチロー・ペース”を続けている。本人はこれがとてつもないこととは思っていない様子。「かみさんからは『単なる目立ちたがり屋』と言われていました」と笑うが、こんな偉業を達成している達人なのに、そんな気取りが少しもないのが実川の人柄であり魅力である。

「子供のころから歩くのが大好きだった。小学校5、6年ごろから学校が休みの日は、食パン半斤にピーナツバターやジャムをつけたのを持って、日が暮れるまで磯子の三溪園などを歩き回っていました」

育ったのは横浜市鶴見区。日本鋼管や旭硝子など工場地帯のど真ん中だった。中学ではガキ大将で、相撲も強く、陸上の400メートルでは横浜地区でトップ。

健脚ぶりは際立っていたが、勉強の方は「全然しなかったからさっぱりだった」。働きながら鶴見工高の定時制へ。途中で転校し、劇団で役者を目指したりしたが、友人の薦めで法政二高に編入した。若い時は奔放で「嫌になるとすぐ辞める癖があった」。高校は卒業まで6年かかった。

仲間に好かれ、足が速かったことから道が開け、法大法学部に入学する。もともと大学では、勉強そっこのけでアルバイトに熱中したために留年し、5年間通った。

山との最初の接点は定時制高校時代。就職した会社に山岳部があった。ところが「会社の山岳部は丹沢の沢登り専門、自分は自然が好きでキャンプのテントが借りたくて入ったんです。高所恐怖症だから、みんなが沢を登っているときは、尾根を登って山頂で合流する。その程度でした」。大学でも奥多摩などでキャンプを楽しむ自然派だった。

大学を出て大手紳士服会社に就職したが、忙しいのは季節の変わり目だけで「こんなの仕事じゃない」と半年で退社。その後は建設会社の現場監督、営業などを転々。

35歳の時、現在住んでいる沼津に移り、3人の子育てのために三島市にある東レの下請け会社の電子部で猛烈に働いた。鶴見からも富士は見えたが、ここも目の前の愛鷹山の上にちよこんと富士が鎮座して美しい。それでも低山の伊豆山系の方に魅力を感じて、休みには子供たちを連れてよく登った。

伊豆の全山、箱根を極めたいと思った頃だった。毎年やってくる中国の研修生が「富士山に登りたい」という。その声に山好きの実川が応えた。富士との深い縁が結ばれる。

1冊に100回ずつ富士登山の記録をつけるノートが今では15冊目になりました。2200回以上登頂した富士山の記録は私の人生そのものです。ノートに貼った山頂の写真を振り返れば、苦しい時も楽しい時も、いつも富士山と一緒にでした。富士山との出会いは家族で初めて登った1985年の夏。山頂から眺めた雲の上からの雄大な景色に心を奪われ、自分の小ささを思い知らされました。

元気なうちにどれだけ登れるか挑戦したい。会社を退職してからは年間200回ペースで登り、目標は「ふじさん」にちなんだ2230回の登頂です。

初めは家族もあきれしていました。そんなに登ってどうするの。途中で挫折するはず。飽きっぽい私は定年までに建設会社や部品工場など職を転々しましたが、富士山は何度登っても自然や人との出会いがあり飽きません。

1日2回登ることもあります。突風で体ごと飛ばされたこともあります。人から見れば、富士山ばかり登って変わった人生と思うかもしれませんが。ただ自分の好きなことだから続けられた。こんな最高の人生はありません。富士山は私にとって、今ではなくてはならない空気のような存在。世界文化遺産になっても新たな発見を楽しみに登り続けていきたいと思いません。